

令和6年12月1日

立教187年

12月号
第627号

字(うに)仁

発行所

天理教宇仁大教会
〒677-0015 西脇市西脇770-4
電話 0795(22)4066 番
FAX 0795(22)4072 番
unigrandchurch@yahoo.co.jp

12月27日 大教会お餅つき
12月29日 青年会献米団参



雅道会発表会 (宇仁大教会にて)

散歩道

今年一年を振り返ると、正月一日の能登地震に始まり、大雨洪水、夏の猛暑など世界的に自然災害による多くの被害がもたらされた。

一方、私達人間社会は、戦争、政界への不信、犯罪の巧妙化、情報の氾濫等、欲と欲が渦巻き、泥沼化している。泥沼の中では、視界は薄れ、真実が見えにくくなってしまう。

みかぐらうた 十下り目四ツに

よくにきりないどろみづや

こゝろすみきれごくらくや

とある。

秋季大祭において真柱様は「正月と同じ能登の地が豪雨に見舞われ・・・同じところに二度も厳しい姿を見せられた。これは、私たちの年祭に対する取り組みが、思召しにお応えするにはまだまだだ、ということなのだと思った。」と仰せられた。あと一年、多くのようぼくが一手一つに、明るく、すみきったこゝろで世界の治まりを願い、教祖にお喜び頂ける三年千日の締め括りにしたいものである。

大教会秋季大祭神殿講話(要旨)

世話人 松村登美和先生

今日は秋季大祭であります。教祖の口を通して、このお道の教えを聞かせて頂けるようになった、記念の所縁の大祭であります。教祖は、その日から五十年かけて私達にいろいろなことを、手本を示して残してくださいました。今日はそのいくつかを改めて振り返って、これから私達がどうやってつとめていこうかという話をさせて頂きたいと思います。

教祖が、神様のやしろになられてから、お隠れになるまで、五十年の間で一番力を入れて教えてくださったことは、おつとめであります。そして、教祖伝や逸話篇など、いろいろなものに教祖が成されてきたことや、残してくださいました言葉が残っています。その一つが、どうやれば人間が陽氣ぐらしできるかの、お手本、ひながたなわけですが、まず、おつとめのことを改めて最初に振り返ってみたいと思います。

でつとめる月次祭。これは、おちばで二十六日につとめているおちばの月次祭や大祭の理を戴いてつとめさせて頂く。ですので、こうやって教会に集まって、みんなで月次祭を参拝するその姿を、一手一つの姿をそれぞれの教会を通して、親神様にお受け取り頂いていると思うのです。その結果、大きなご守護を頂くということなのですが、この月次祭のおつとめのことをどういうおつとめなのだろうと考える時に、参考になるのが元初まりのお話であります。教典の第三章に元の理の話が載っています。その一番最初に説明の文章が書かれているのですが、「親神は、陽氣ぐらしを急ぎ込まれる上から、教祖をやしろとして、この世の表に現れた、奇しきいんねんと、よふきづとめの理を、人々によく了解させようとて、元初まりの真実を明かされた」と書かれているのです。私達が毎日つとめているおつとめ、なぜつとめるのか、おつとめをつとめると、どういう訳で神

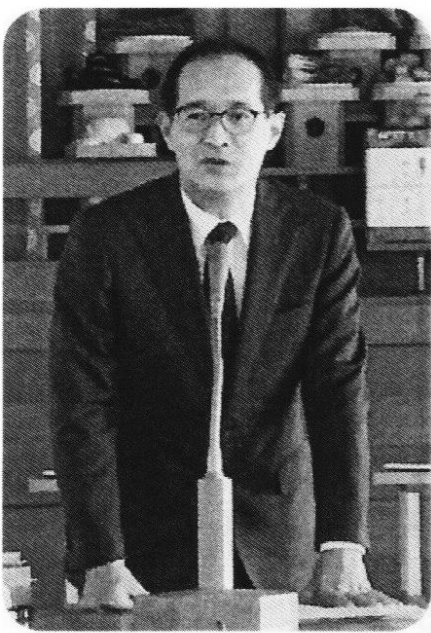
様からご守護頂けるのかということとをみんなに分かって欲しいのだと、そのためにこの元初まりの話聞かせてくださったということ

順を追ってお話をしたいと思うのですが、立教の時、天保九年に教祖の口から初めて神様のお言葉が出た時のお言葉が、「我は元の神、実の神である」でした。この「元の神、実の神」と二つあるわけですが、元の神っていうのは、元初まり、人間を元々作ってくださった神様だという意味合い。これなぜかという、日本の国はいろんなところに神社があって、いろんなところに神様が居る。そういう中でこの神様は、そういういろんなところにある神様ではないのだと、本当の人間を最初に創った本当の神様なのだっていうことを親神様は仰りたかったのだろうと思うのです。実の神というのは、実際のところ、私たちをご守護くださっている神様っていう意味だろうなと私は悟らせてもらっているのですが、毎日の生活の中で、実質、ご守護をくださっている神様、それがいわゆる十全の守護のおはたらきということだと思っておりますが、そのことを教えるために、

元の理もそういうことを分からせるために教えてくださっていると、思うのです。元初まりのときに、親神様は、いろいろな生き物を手に元に引き寄せられて、それを道具にして人間を創ってくださいました。そして最初に生まれる子供の年数が経ったら、お前たち、みんな神様として、人間から拝ませてあげるから協力してくれ。そういう約束をされたので、それぞれのはたらきに使った道具に神様の名前をつけられたから、十の神様の名前があるわけですが、その十のはたらき、これを教えてくださったのは、十全の守護のお話。このお話は親神様の御守護、おはたらきを人間に分かりやすくイメージできるように教えてくださっていると思うのです。

そして、おつとめの話に戻るのですが、おちばの二十六日のおつとめは、ご覧になった方は分かると思いますが、かんろだいがあって、かんろだいの周りに十人のつとめ人衆がお面をかぶっておつとめをする。あの十人というのは、この元初まりのお話に出てきた十の生き物のおはたらき、例えば、亀の甲羅を背負って踊っていたり、シャチの面だったり、そういう神

楽面を使っておつとめをしています。このおぢばでのおつとめというのとは何かというと、おふでさきにこう書かれています。「このよふをはじめかけたものをなち事めづらし事をしてみせるでな」「このよふをはじめかけてからにないつとめ またはじめかけたしさをさめる」というのがあります。この世を初めたというのは元初まりの話であります。親神様は何もないところから人間を創ってください。それと「をなち事めづらし事をしてみせるでな」。「またはじめかけ」というのは、九億九万年前に何もないところから人間を創った。同じようにもう一回初め、やり直す。初めかけてあげるというニュアンスの歌であります。おつとめをしつかりしたら、世界が治まる。おつとめをすることで、例えば、世界の陽気ぐらしを神様のご守護くださる。それはなぜかという、もともと何もないところが人間を作った神様だから、同じようにもう一度、人間の世界を作り直すことができる、そういう不思議なおつとめ、という意味合いであります。また、こういうおふでさきがあります。「みなそろてはやくつとめをするならバ そば



がいさめバ神もいさむる」。みんなが一生懸命おつとめをすれば、よく「勇んでおつとめを」と挨拶をしますけれども、やはりこれが大事で、みんなが一手一つにきちんとおつとめをすれば、我々が気持ちよくなるわけです。「お前たちも勇むようなおつとめをすれば、神も勇む」とおっしゃっています。神様が勇むというのはどういうことかという、例えば、食べたものがつるつるとうまく入る、つるつるとうまく出る。人間の体は親神様の借り物ですから、親神様がそのはたらきを盛んにしてください。たら人間は健康になり、病気が治るわけです。だから、神様が勇むと、この人間の体もそうだし、世の中の動きはたらきが活性化してくる。だから、おつとめをすることで、ご守護がいただける、ということ、教祖は教えてくださった、ということ、お互いに忘れず覚えておきたいと思っています。

「つとめさいちがはんよふになあ たなら 天のあたゑもちがう事なし」。親神様はしっかりおつとめをすれば、親神様のご守護は間違いないくちゃんといいただけるから、おつとめを頑張つてねというのがこのお道の教えであります。教祖は五十年かけてそれを教えてくださったわけですから。そしてお隠れになった時も、まだ本当は二十五年ある命を縮められた。その一つは当時、おつとめをすると、教祖が警察へ連れて行かれる。ですから、先生方はおつとめを見合わせるようになってしまった。しかし、お道はおつとめでご守護頂く教えですから、おつとめをしなればいけない。おつとめをせよとおっしゃった。教祖が捕まるからみんなおつとめをしない。そうした中で教祖がお身体をお隠しになった。でもお屋敷にずっとおられると、存命の理の話をしてくださいました。それが教祖の五十年のひながたであります。その今、年祭活動の最中、あと一年少しであります。その年祭活動は教祖がご隠れになった時のその親心にお応えをしようということとつとめしているわけですから、お隠れになった時の教祖の一番の思いは、おつ

とめをしつかりつとめてくれということだと思ふのです。だから、そこを一つしっかり、お互い考えていくことが大事だと思います。これはいつもするお話ですが、「ずつないことはふし。ふしから芽を吹く。やれふしや、やれふしや、楽しみやと大きな心を持ってくれ」、というおさしづ。ずつというのは漢字で書くと術。手術の術がなまってずつというわけですが、れども、術がないという言い方しますね。手段がない、どうしようもない、もうどうにもならない、何でこんなことが起きてくるのだろう、ということ、ずつないことと大和では言うのですが、ずつないこと、どうしようもないことは、これはふしなのだ。だけど、ふしから芽が出てくるのだ。だから、ふしに合った時は、心を倒すのではなくて、ふしだふしだ、ここから新しい芽が吹いてくる。これでも、成長できる。そういう大きな心を持ってくれというのが神様の思召しであります。「ふしが無ければ、何かの事も聞き分けがでん、というおさしづもあり。そしてもう一つ「一つふしという。ふし無くば分

からん。どういう事あるうか、こういう事あるうか。ふしから芽が出る。」というおさしづ。ふしに会った時に、ふしから芽が出るのだけれども、芽が出るということはやはり成長ができる。今までの自分の間違いに気がいたら変わっていく。いわば、心が変われば神様がよく働いてくださる。そして例えば、金銭縁談のご守護もたくさん頂けたり、引き出しのご守護を頂けたり、自分の運命が変わっていくわけであります。心が変われば。そうなるためには、ふしが起きたときに、これはどういうことなのだろうなあ、親神様が自分にどういうことを教えてくださるうとしているのだろう、自分はどいう癖があるのだろう、どいうふうに歪んでいるのだろうということを、ああかな、こうかなと考えないさい、というのが、このおさしづの思召しだと思います。考えるこの時点で、おそらく癖は一つ修正されていると思うのです。おそらく考えないからどんな癖がついていくわけで、そういうことを繰り返して行く中で、必ず真っ直ぐになれて、神様から大きなはたらきが頂ける、運命が変わっていく。そういう教えを、教祖は五

十年かけて教えてくださったわけで、その教えをただ、教祖伝の中に書いてあるだけで終わらせてしまっていたら、何のために残してくださったのかわからない。こういう話をやはり我々は誰かに伝えて、その人に陽気ぐらしができるように変わって行って頂くことが我々ようぼくの仕事であります。先ほど、教祖の年祭はあと一年と申しました。この一年。諭達の中では、ようぼく一人一人のつとめのことについて書かれています。「進んで教会に足を運び、日頃からひのきしんに励み、家庭や職場など身近なところからにいがけを心がけよう。身上事情で悩む人々には親身に寄り添い、おつとめで治まりを願い、病むものにはおさづけを取り次ぎ云々」と。自分に出来るたすけ一条の御用は何か。例えば今、こういう話をさせてもらいましたけれども、そういう話をここに百人いれば、百人全員それができなくちゃいけないということでもないと思うのです。会長さんがいて、会長さんが教会でその話をする、あるいは、おぢばに帰れば、大教会様がおられる、主任先生がおられる。そういうところに人を連れて行ったりすること

はできるという人もいるでしょうし、おぢばに帰ると、おぢばの本来に独特な有難さの雰囲気、空気があります。そこに、たとえば自分の知っている人、悩んでいる人がいて、一緒におぢばに帰りませんか、なんか気が楽になりますよ。神殿をゆっくり参拝して三十分。そこでゆっくりしたら必ず何か楽になりますよ、という一言を言ったりはできる。神様の話ができなくても、そうやって親身に寄り添って、一緒に教会に行こうよ。教会行ったら会長さんがおさづけをしてくれるから、というおたすけの仕方もあるし、それぞれが、自分が、教祖が残してくださったひながたのどこを辿らせてもらうかということを決めて、三年目を通らせて頂くということが大事であろうと思います。

最後にもう一個。ようぼく一斉活動日が来週三日・四日につとめられます。これはそれぞれの支部で開催をされるわけですが、開催は支部ですけれども、声かけはそれぞれの教会がして頂くことになっています。教会が声をかけなければ、盛んな支部は別ですけれども、なかなか支部からそこに住んでいる、特に遠くに住んでいる、教会から離れて住んでいるようぼくに声がかかるということは少ないです。だから、教会からこういうのがあるよと、声をかけて頂くことが大事で、それも普段、教会に帰って来られない、また、しばらく時間がないという方には、しっかり声をかけてみて頂きたいなと思うのです。声をかけて、行く行かないは、親神様のご守護の世界なので、ただ声をかけるのは教会の役割ですから、その結果、まだあと三回ありますから、普段行き来のない人でもそれを届けることで、それを理由に行き来を作ることがができます。三回あれば、例えば一回目は郵便で送って、二回目は前も送ったけれどと言って、行って手渡しをすることもできるし、何かこれをきっかけに、離れている人に声をかけていくことができると思っています。そうしたら一斉活動日があと三回ございますから、ぜひ、無駄になるということを考えず、無駄を楽しむ気持ちでどんどん声をかけて頂けたらなと思います。ではこれで終わらせて頂きます。ありがとうございました。

一理塚

なぜ竹に節があるのか？もし竹に節が無かったら、竹は成長が大変早いので、自分の重さを支えられなくなり倒れてしまう。それを防ぐために節があるんだそうです。

節があるからこそ、少々の風雪や雨にも折れることなく、倒れずに一時はしなったように見えてもまたビュンと盛り返す。これは竹の節のお陰です。

これを人間に例えてみると、私たちの長い人生にも様々な節があります。身上とか事情とか言うに言えない心の苦しみとか、そういう節がありますが、しかし一方ではその節があるおかげで私たち自身の心が少々のことでは倒れないようになるのだと教えていただいています。

竹をよく見ると竹には後々から節が出来たのではなく、最初から節がいっぱいある。竹の子の時からある。その節と節との間が伸びてきている。節を越えて伸びていく。一つの節を通り

超えてまた伸びる道があるわけです。「節から芽が出る」と教えていただきますが、それぞれ直面している節にどのように通っていくのかということが大きな心の課題となります。

教祖御在世当時、青年さんに「その庭先の大きな樽桶と小さなお椀を両方並べておいてみなされ」と、教祖がおっしゃたことがあったそうです。青年さんは言われるままに大きな樽桶とごはん茶碗ほどの小さな椀を雨の中に置かれました。それをじっと見ておりますと、小さなお椀のほうに雨がすぐにいっぱいになってしまい、どんどん水があふれている。大きな方はなかなか一杯にならない。その姿を見て、「あんたどう思いなさるかえ」と教祖はお尋ねになったけれども青年さんはすぐには返答できなかった。その時教祖は、「与えるところの天の理は一つ、なれど受ける心に理が変わっていくのや」と仰ったそうです。天の恵みはみな平等に頂いている。けれども受ける心の器によってそれぞれみんな変わってくる

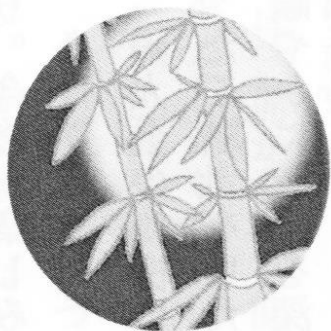
ということですが。それぞれの節に直面している今、それをどのように受けるかというのは、一人一人の心ひとつにかかっています。できることならば、小さな器で受けるのではなく、大きな心の器で喜びとしてそれを受けさせてもらいたいものだと思います。

親神様は様々な形で日々ご守護をお見せくださいます。そして多くの人が大なり小なりこの御恩の恩恵に浴し、救けていただいているのです。けれども同じご守護をいただいても、その受け取り方は様々です。ご守護を見せていただいても、それをさして感じない人もおられるのではないか。他方それを心からありがたいと感じる人もおられます。そしてそれをありがたいと思う人のなかにも「ありがたい、ありがたい、良かった」で終わっていく人と、ありがたいからそれに対してどうさせていたいただいたらよいかを考える人もおられます。

教祖御在世当時、人々が「救けていただいた御礼をどうさせ

ていただいたらよいでしょうか」と、教祖にお尋ねされますと、教祖は「人を救けに歩きなされ、救けていただいたその喜びで救けてほしいと願う人を救けに行きなされ」と仰せになりました。

私たちは神様のご守護に恵まれ過ぎますと、そのご恩に対してついつい鈍感になってしまいます。そしてご守護いただいたあの時の感激も薄れ、ついには日々のありがたいはずのことが不足の種になってしまうこともあります。ご守護をご守護としてありがたく思えなくなれば、教会に参拝に行っても、身は神様に向かって心は神様から遠ざかる。私たち人間の持つ弱さがあります。ご守護をありがたいと感じご恩をありがたいと思うならば、少しでも「人を救ける心を持ちなさい」という教祖のお教えくださった道に沿って歩むことこそが神様への御恩報じの道につながっていくのだと思います。



宇仁青年会 青年会前夜祭出店・総会参加

十月二十七日、「おやさとふしん青年会ひのきしん隊結成七十周年記念 第九十八回天理教青年会総会」が本部中庭にて開催され、宇仁分会から十三名が参加させて頂きました。総会では中山大亮青年会長は基本方針「心を澄ます毎日を。―ほこりを減らし、誠を増やす―」について、自身の経験を元に若い青年会層にも分かる様にお話し下さいました。

また、総会前日の夜に前夜祭があり、宇仁分会は「とりやき」の模擬店を出店させて頂きました。

模擬店当日は二十六名（内女子青年七名）と予想以上に沢山の方が集まって頂き、開始から一時間もかからずに完売となりました。

模擬店を覗きに来て下さった宇仁の方も何人かおられ、心を寄せて頂いてる事に本当にありがたく感じさせて頂きました。最後になりましたが、ご参加



下された方、またお声がけお心寄せ誠にありがとうございます。

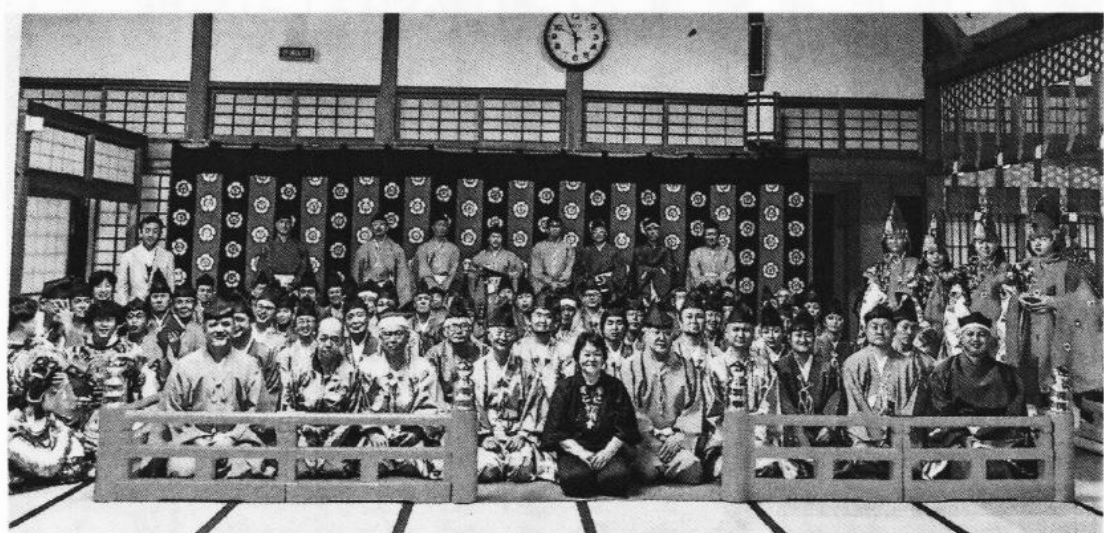
雅道会発表会開催

去る十月二十八日、雅道会発表会が開催されました。雅道会とは兵神大教会と分離陸級七教会の雅楽部の総称であり、年に一度の発表会と講習会を開催し、各雅楽部の技術研鑽と懇親を深めております。

本年は宇仁が当番教会として発表会を担当し、午後からは西脇小学校で観賞会、そして夕方から発表会をさせて頂きました。

西脇小学校は今年創立百五十年を迎えるということで、記念行事の一環として観賞会をさせて頂きました。修学旅行中の六年生を除く全校生徒を対象に、低学年と高学年と2コマに分け、演奏や楽器紹介、楽器体験などをさせて頂きました。

発表会での各大教会の演奏は、二十数年前の初期の頃を思うとずいぶんと演奏レベルが上がってきたと皆口々にされておられました。また、次世代を担う若



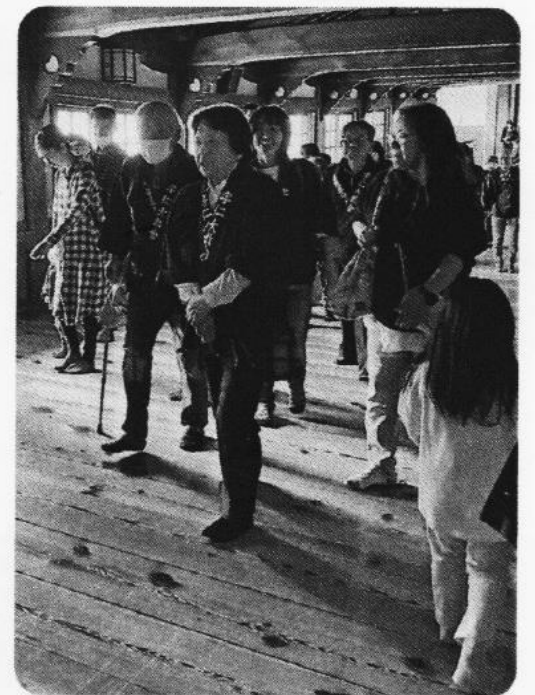
い顔ぶれもあり、今後が楽しみです。でありました。懇親会では、婦人会の皆様による心のこもったご馳走をいただきながら、賑やかに懇親を深め、楽しいひとときはあっという間に過ぎて散会となりました。雅楽部では老若男女問わず参加者をお待ちしています。また、祭典や葬儀の奏楽だけでなく、いろんな場で演奏しておりますので、お気軽にお声がけください。

大教会一斉団参を実施

去る十一月十日、秋晴れの清々しい陽気の中、大教会一斉団参が行われ、少年会員約三十名を含む百五十名を超える帰参者がおぢばに参集した。（帰参報告の詳細は後日発表の予定）

一同は、午前十一時三十分の本部お願いづとめに合わせて、東礼拝場でおつとめをさせて頂き、その後教祖殿・祖霊殿を参拝。昼食は、別席者のある教会は詰所で本部食を、それ以外の教会は東講堂でおにぎり弁当を頂いた。

午後からは、東講堂周辺の除草・清掃ひのきしんを別席者を除く全員でさせて頂き、午後三時大教会長様より「先日の本部秋季大祭で真柱様から、三年千日残り三分の一を勇んで通り、教祖にご安心頂きたい、とお話し頂いた。この旬に今日のように度々とおぢばに帰らせて頂き、教祖にお喜び頂きましょう」とのご挨拶を頂き、それぞれと帰途に就いた。



宇仁女子青年 「こかん様に続く会」

十一月十日、宇仁一斉団参に合わせこかん様に続く会を本部でお願いつとめの後、詰所で開催させていただきました。計十一名(内、対象年齢者三名)が参加し、支部長様のお話を聞かせていただいた後、女鳴り物の練習をしました。

各々希望の鳴物の練習をしましたが、中には女鳴物を触るのが初めてという女子青年もいて最初は苦戦しましたが担当者の奥様方に教えていただきながら合わせて弾けるまでになりました。普段、教会の月次祭などで弾く機会のある女子青年も構え方や弾き方など改めて教えていただき知らずについていた癖を直すきっかけになりました。

その後、詰所三階の窓拭きひのきしんをしました。晴天のご守護をいただき全員で気持ちよく勇んでひのきしんさせていただきありがたかったです。今回は短時間の開催でしたが普段なかなか会えない女子青年同士、

話をしたり親睦を深める貴重な時間になりました。

宇仁女子青年では毎月の例会やひのきしん、イベントなどを企画しています。LINEや女子青年だよりでお知らせしますのでぜひお気軽にご参加ください。道につながる女子青年の一員として三年千日の最後の年に勇んで通らせていただきましょう！



全教会布教推進月間 実動報告

報告書提出教会

三十三箇所(内青年会・婦人会・女子青年含む)

実動延人数 五七五名

神名流し 一六二名

路傍講演 九五名

戸別軒数 四六〇三軒

リーフレット 八八一三枚

その他(街頭での声掛けなど) 三九二四件

● 計 報

兵庫中央分教会

二代会長夫人

笹倉信子氏

令和六年十一月十九日出直

されました。(享年八十四歳)

昭和四十三年おさづけの理拝戴、昭和五十二年より二代会長夫人として、また平成十九年からは詰所主任夫人として長くおつとめくださいました。

慎んで哀悼の意を表します。

おぢば通信

十月のうごき

◎初席者 豊原 藤原恭平

◎をびや許し

西脇 遠藤百恵

◎十月帰参者 一八九名 (詰所調べ)

12月行事予定表

6日 青年会例会

9日 婦人会例会

15日 布教実働日

19日 少年会例会

24日 大教会月次祭

午前10時30分執行

神名流し

26日 本部月次祭

午前9時執行

27日 大教会お餅つき

29日 青年会献米団参

婦人会より

◇大教会炊事当番

12月 豊原
1月 神福A
2月 直属
よろしく
お願いします